進修同窓会々報

発　行　土浦一高進修同窓会
編　集　同窓会会報編集委員会
〒300-0051　茨城県土浦市真鍋4-4-2
ホームページ http://www.sin-syu.jp/
Eメール　shinshu@tsuchiura1-h.ibk.ed.jp

会長あいさつ

会長　大野金一（高８回）

２０１９年12月に中国武漢市で発生した新型コロナウイルス（covid-19）が、今や世界中に拡散して、７月６日時点で死者４００万人を超えたと報道されました。

毎年４月に開催してきた進修同窓会の総会も、前年度に続いて今年度も来年度も中止し、評議員会の決議をもって総会の決議に代えるということにさせていただきました。

総会といっても、出席者の殆どは、卒業60・50・40・25・15周年記念祝賀式に出席する卒業生ですが、同じ年次の全国の卒業生が集まる機会は、この周年行事とその前後に開催される懇親会しかありませんので、これが同窓会（生）にとっての最大の楽しみになっていました。

今年度も、昨年度同様、自発的に学年会を開催される場合には、私が記念品を持ってお祝いに伺うということにしていましたが、今年度も昨年度同様、自発的に懇親会を開催する年次はありませんでした。

進修同窓会は、本部の総会がこういう仕組みですので、実質的には、各支部の活動が必然的に中心的な役割を果たしています。コロナ渦中では、東京支部（東進会）のように、一部は会場に集合して、他のメールアドレス登録者とはｗｅｂ会議方式で総会を開催し、総会議事は書面決議をもって代える方法もありますが、いずれにせよ、一堂に会して旧交を温めるのが同窓会の楽しみなのに、それが叶えられないというのは、残念至極としか言いようがありません。

支部について言えば、支部の設立を訴えてきたつくば支部が、ようやく設立の運びとなりました。

この３月の総会に代わる評議員会で、正式に「つくば支部」（仮称）の設立が承認され、去る８月10日、市内の日航ホテルつくばで、本部正副会長の一部も発起人に加わって発起人会を開催し、年内には設立総会（ｗｅｂ会議方式）を開いて、動き出す予定です。

つくば市は、昭和60（１９８５）年の筑波万博開催で、世界的にも知られるように成熟した都市に発展し、その頃から、土浦一高にも、つくば市内の中学校から進学する生徒が、増えてきました。

５年おきに発行される進修同窓会名簿の２０１５年版によれば、土浦地区に次ぐ会員を擁する大きな地域であります。地元の支部として活発に活動されることを期待して止みません。

この新型コロナウイルスは、当初、感染者の咳や発声による飛沫が室内に残っていて、それに接触して第２次感染を招くと言われてきましたが、最近の研究によると、ウイルスを含んだ微粒子（エアロゾル）が空中に舞っていて、それを吸入して感染すると言われています。

私達が、ワクチン接種をはじめとする、充分な対策を講ずることで、コロナが収束し、同窓会活動が更に活発になることを願っております。

校長あいさつ

校長　中澤　斉（高33回）

進修同窓会の皆様には、日頃より、本校の教育活動にご理解とご支援とを賜り厚く御礼申しあげます。

昨年から続くコロナ禍は、ワクチン接種が進みつつあるとはいえ、未だに収束の見通しが立ちません。そんな中、本校においては、様々な制約を受けながらも、生徒と教職員とが一丸となって、授業や部活動など、可能な限りの教育活動を続けております。昨年は中止となった一高祭も、校内発表のみという苦渋の選択ではありましたが、なんとか開催することができました。生徒達の創意工夫によって、ゲート製作、体育館での発表、赤の広場でのパフォーマンス、各クラスの企画など、伝統と文化を継承できたと思います。現在、一高オリンピック、歩く会など各種行事や、SEG海外研修などについても、実施に向けて慎重に準備を進めているところです。また、進学面においては、東京大学22名をはじめ、医学部医学科や難関大学に多数合格した先輩の背中を見て、後輩たちも、高い目標を持ち、その実現に向かって日々努力していますので、大いに期待しています。

今年度の明るい話題を3点ご紹介いたします。まず、「土浦一高附属中学校の開校」です。附属中開校は、120年を超える本校の歴史の中でも、特筆すべき出来事です。4月7日、大井川県知事の開校宣言に続き、記念すべき第1回の入学式を挙行しました。2クラス80名の附属中生が入学し、現在、元気に学校生活を送っています。中学生は、タブレットを駆使した授業や、高校生と共に練習する部活動、そして何より高校生と同じフロアで生活することを通して、一高スタイルを身に付けつつあると感じています。高校生も、そんな中学生を温かく迎え入れ、本校の中高一貫教育は、順調にスタートを切りました。

次に、「聖火リレーのスタート地点となったこと」です。今年は、1年の延期を経て、東京オリンピック・パラリンピックが開催されました。それに先立って実施された聖火リレーにおいて、本校旧本館前が、土浦市のスタート地点に選ばれました。聖火リレーのスタート前に、旧本館前において、本校の合唱部、弦楽部、吹奏楽部による演奏と応援指導部によるエールとが披露され、聖火リレーを大いに盛り上げました。参加した生徒たちにとって、千載一遇のチャンスであり、一生の思い出になったことでしょう。

3つ目は、「全国高校定通体育大会への2種目出場」です。定時制では、陸上競技部とバドミントン部とが、見事、全国大会出場を成し遂げてくれました。仕事と勉学とを両立させ、加えて部活まで懸命に努力する姿には、感動を覚えました。

本校は、「自主・協同・責任」の校訓のもと、伝統を継承しながら、様々な変化を柔軟に受け入れ、発展し続けてまいります。今後とも、進修同窓会の皆様のお力添えをお願いいたしますと共に、進修同窓会の益々のご発展と、会員の皆様のご健勝とをご祈念申し上げます。

新任職員紹介

全日制教頭　須藤　一道

進修同窓会の皆さまには、日頃より、物心両面にわたり、本校の教育活動を支えていただき、誠にありがとうございます。他の高校では真似のできない様々な取組みができるのも、同窓会のネットワークの力と強く感じております。土浦一高のさらなる発展のため、微力ながら精一杯頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

定時制教頭　奈良　由紀子

進修同窓会の皆様には、定時制での教育活動にも、日頃よりご理解とご協力を賜り深く感謝申し上げます。私の教員生活のスタート地点は土浦一高の全日制でした。8年間勤務した際に出会った素晴らしい生徒たちは、現在日本の内外で活躍しており、心から誇らしく思っています。そしてまた幸せなご縁に恵まれ、今度は定時制で勤務することになりました。進修同窓会の皆様が守られてきた伝統と歴史の重みを愛おしみながら、土浦一高の更なる発展のため微力ながら力を尽くして参りたいと思います。今後ともよろしくお願い致します。

事務室長　大森　伸一

進修同窓会の皆様には、日頃より本校の教育活動に深いご理解と多大なるご協力を賜り、まことにありがとうございます。今年度の定期人事異動に伴い、事務室長として赴任しました大森伸一です。同窓会幹事の務めを果たすとともに、微力ながら本校の更なる発展のため尽力する所存ですので、今後ともよろしくお願いいたします。

令和３年度進修同窓会総会開かれず

新型コロナウイルス感染が収束されないため、臨時正副会長会議を令和２年10月３日に開催し、同窓生の安全確保の観点から止むを得ぬ措置として、今年度においても４月11日（日）に開催予定でありました定期総会及び周年祝賀式を中止することに決定いたしました。総会議事につきましては、評議員会の議決をもって総会の議決に代えさせて頂くことになりました。

大野会長

ホテルマロウド筑波１階大広間での令和２年度評議員会の様子

臨時正副会長会議を受けて、令和２年度評議員会が、令和３年３月27日（土）に開催され、各回卒業生代表者によって、全ての議事議案を承認していただきました。議事等の資料につきましては、土浦一高進修同窓会ＨＰの「令和２年度評議員会資料」をご覧下さいますようお願い申し上げます。現在、令和３年度の活動を進めている次第ですが、何かご要望がありましたら、同窓会Ｅメールにてご連絡を頂けますと幸いです。

（本部幹事　小泉　明（高19回）

評議員一覧（敬称略）

9月30日現在

小原芳道（土浦支部・高21回卒）大曽根清治（土浦三中地区支部・高17回卒）広瀬昌則（高津天川支部・高16回卒）廣瀬昭雄（小松支部・高10回卒）清水浩（真鍋支部・高13回卒）田上顯（新治支部・高18回卒）武田信則（美浦支部・高８回卒）宮本武憲（牛久支部・高14回卒）

山村邦男（龍ヶ崎支部・高12回卒）海東宗平（取手支部・高11回卒）飯泉春長（真壁支部・高11回卒）三輪康史（八郷支部・高14回卒）出頭整（小美玉支部・高17回卒）大竹伸一（水戸支部・高17回卒）齊藤泰雄（東葛支部・高21回卒）飯塚哲哉（東京支部・高18回卒）

塚田昇（宮城県支部・高６回卒）糸賀秀徳（県庁支部・高31回卒）鳥羽吉嗣（常陽亀城会・高36回卒）藤川雅海（つくば銀行桜水会・高23回卒）矢口孝則（上海支部・高29回卒）梅澤正之進（中40回卒）高橋秀（中43回卒）横田照治（中43回卒）久保木康輔（中46回卒）井坂雄（中47回卒）真中義雄（中49回卒）御田寺孝一（高５回卒）尾形省三（高５回卒）田村敏明（高６回卒）住尾勉（高７回卒）本川軍治（高８回卒）

古森貞弘（高９回卒）鈴村博一（高10回卒）長瀬宗男（高11回卒）川上稔（高11回卒）瀧ヶ崎洋之（高12回卒）堀越昭（高13回卒）南隆男（高14回卒）

野村ルナ（高15回卒）島田卓光（高15回卒）石田栄一（高16回卒）五頭英明（高16回卒）坂本栄（高17回卒）石神毅（定14回卒）鈴木志郎（高18回卒）

中村志郎（高19回卒）長峰一男（高20回卒）柴沼和広（高21回卒）荻沼秀一（高22回卒）

藤澤宏（高23回卒）海老原一郎（高24回卒）前島寛誠（高25回卒）冨田格（高26回卒）桜井浩（高27回卒）小城豊（高28回卒）島岡宏明（高29回卒）

野澤博（高30回卒）茂木久和（高31回卒）下條卓造（高32回卒）原光広（高32回卒）片岡達郎（高33回卒）加治行雄（高34回卒）塚本一也（高35回卒）大曽根靖夫（高36回卒）

齊藤康彦（高37回卒）村上太郎（高38回卒）日比野有（高39回卒）大川政則（高40回卒）

矢口和弘（高41回卒）木島則幸（高42回卒）目次康男（高43回卒）小倉洋平（高44回卒）

吉田謙（高45回卒）中井川大助（高46回卒）中山雅博（高47回卒）小野重満（高48回卒）

松井泰道（高49回卒）青山大人（高49回卒）小池利明（高50回卒）鈴木信行（定47回卒）

木村友和（高51回卒）飛澤美穂（高51回卒）戸谷義治（高52回卒）島田秀瑛（高53回卒）

兵頭翔洋（高54回卒）坪松章人（高55回卒）島田達也（高55回卒）工藤圭太（定52回卒）

辻尚宏（高56回卒）菱沼智之（高56回卒）内田健人（定53回卒）櫻井忠男（定53回卒）

沖田賢亮（高57回卒）佐々木真樹（定54回卒）八木太一（高58回卒）酒井義正（定55回卒）

内山昌博（高59回卒）酒井彩芳（定56回卒）長谷龍骨（高60回卒）山下一宏（定57回卒）

井原謙太郎（高61回卒）兒玉拓也（定58回卒）倉内裕史（高62回卒）鈴木真介（定59回卒）島田菫（高63回卒）福永舞（定60回卒）一色竜杜（高64回卒）寺門広人（定61回卒）

原部直輝（高65回卒）高花翔太（定62回卒）藤井章太（高66回卒）佐藤翼（定63回卒）

大藤由紘（高67回卒）鳴海聖（定64回卒）関俊希（高68回卒）

佐藤香雪（定65回卒）山口航平（高69回卒）入田杏壱（定66回卒）森裕介（高70回卒）

山口陸冬（定67回卒）小林萌愛（高71回卒）遠藤美咲（定68回卒）宮田明音（高72回卒）

塚本光晟（定69回卒）大島弘也（高73回卒）根崎伊吹（定70回卒）

令和４年度も総会中止

臨時正副会長会議を令和３年９月３日に開催し、来年度の定期総会について協議いたしまして、新型コロナウイルス感染の収束が見通せない情勢に鑑み、同窓生の安全確保の観点から止むを得ぬ措置として、令和４年４月23日（土）に開催を予定していました進修同窓会定期総会及び周年記念祝賀式を中止とすることに決定いたしました。なお、総会議案については、前年度同様評議員会の議決をもって総会の議決に代えさせて頂きます。

また、同窓会事務局として、各学年代表幹事と今後の態勢について、ご相談しながら進めてまいりたいと思いますますので、この機会を楽しみにしていた周年該当者におきましては、各学年代表幹事からのご連絡待ちということでご了承願いたいと思います。

卒業50周年を迎えて思うこと

高23回　百瀬由紀夫

私達は昭和43年４月に、今は跡形も無い旧体育館（＝現在テニスコートとして使用）に於いて入学式を胸を弾ませながら迎えた事を今日此の頃の様に思い出します。もう既に半世紀も過ぎ去ってしまったのかなと熟々時の流れをあらためて感じるだけです。

その入学当時私が感じた土浦一高に対するイメージを一言で表すなら〝自由〟と云う事であります。校則も無く、クラブ活動入部も自由、先生方の考え方、指導方法が基本的に〝自由〟であったからこそ自由な雰囲気（＝校風）になっていたと思われます。６月から毎日新聞に連載コラム「母校をたずねるーぐるっと東日本―」が始まり、執筆された先輩・後輩諸氏も中で指摘されている通り先生方の中に自由闊達な発想思想があったからだと私も思います。その先生方の影響もあり、私は自分なりに目的意識を持ち大学・学部学科を選択し大学入学した様に思えます。

その当時は校舎が足りずに、国指定重要文化財である旧本館（コの字形木造校舎）の他に現在鉄筋コンクリート４階建てが建っている所に２階建てのプレハブ校舎を定時制と共用使用していた時代でした。因みに、私などは３年時もプレハブ平屋建てで過ごしましたが、学年の定員が４００名（50名×８クラス）であったことから、致し方無いと半ば諦めてはおりました。

１２０数年の長い歴史を持つ一高の歴史の中で私達が過ごした３年間は、一瞬の１コマの出来事の様ですが、凝縮された３年間を紐解くとそれぞれ走馬灯の様に次々と思い浮かんでくるのです。

一高祭の出し物の製作を夜遅くまでかかり、土浦駅のホームより見上げた思い出などは、今でもフラッシュバックの様に思い出されます。（一高祭も土浦花火競技大会も現在行われている時期・場所とも異なっております。）

ただし、どこかで流れているＣＭソングと同じ、思い出はモノクロで色を各自付けなければなりません。もう既に鬼籍に入られた友の顔が次々と浮かんでまいります。進修同窓会本部より50周年記念祝賀式典がコロナ禍の中、中止という本部のスタンスを聞き、最初はちょっとがっかりしましたが、諸般の社会的状況を鑑みれば当然の帰結だと思います。但し、何年も会っていない同窓生に是非とも会って親交をはかりたいと云う方の気持ちを酌み、同窓会は延期と決定させて頂いた事をこの書面をお借りしご報告させていただきます。

65歳以上のワクチン接種が始まりある程度のコロナ感染症が収束した状況になれば、幹事会を開催し同窓会開催の是非を諮っていきたいと思います。早くマスクを外し大手を振って酒を酌み交わしたいものです。これが皆の願いである事は間違いありません。

皆様方との再会をたのしみにしております。

卒業40周年を迎えて「思い出…」

高33回　片岡　達郎

令和３年度進修同窓会総会及び卒業記念祝賀式は、残念ながら新型コロナウイルスの感染症防止対応として中止となり、あわせて行う予定であった高33回生祝賀会も実施できず仲間同志で思い出を語る場は、当分の間お預けということになってしまいました。

私たち高33回生は、卒業40周年を迎えることができました。昭和53（１９７８）年４月に入学し、昭和56（１９８１）年３月に卒業した学年になります。入学して間もなく、クラスの友人から「片岡の写真が貼ってあるぞ」と言われ、あわてて昇降口前に見に行くと、合格発表当日よろこんで電話をしている自分の顔が掲示されてありました。恥ずかしく思いながらも逆にそれをネタにして友人たちと大笑いをして楽しんだ思い出があります。私の高校生活はここから始まったような気がします。

１年生の「一高祭」では、先輩たちの自主的な、アイデア溢れる、パワフルな活動やイベントに圧倒され（感動し）ました。この年共通１次試験が始まり、学校行事の調整の中で「一高オリンピック」が初めて開催されました。その他、クラスキャンプや歩く会など全てが生徒たち自ら手作りでつくりあげていくものでした。

２年生では、学年全体がまとまって長野県野反湖で３泊４日の学年キャンプが行われました。クラスの枠にとらわれず多くの仲間たちと交流できる絶好の場となりました。これをきっかけに、一高オリンピック、歩く会、そして一高祭、いわゆる一高３大行事を、学年全体で一致団結して盛大に取り組むことができました。このときの仲間たちは、生涯忘れることの出来ない素晴らしい仲間たちです。

学習面はもちろん、部活動や学校行事など、すべての面でとことんやり抜く土浦一高生の姿は、現在も「一高スタイル」として受け継がれています。現在、縁あって土浦一高に勤務している私にとっては、この「一高スタイル」の継承こそが、大切な使命のひとつだと考えております。土浦一高では今年度、附属中学校が開校し、新しい姿が求められています。しかしながら、私にとってこの思いは、貴重な高校３年間、学校行事や生徒会活動に対して夢中になって取り組めた原動力であったと思います。

また、高校３年の途中まで憧れの旧本館で授業を行い、その後現在の校舎に移りました。両方の校舎の思い出があることも誇りのひとつだと考えております。

こうした沢山の思い出の中で思いっきり高校時代を送ることができたのも、先生方のご指導があったからこそだ、と思っております。学年主任の栗山作次郎、副主任長壁英進、Ａ組担任中村昌平、Ｂ組担任松井泰寿、Ｃ組担任片岡博、Ｄ組担任大崎高嗣、Ｅ組担任植木元生、Ｆ組担任鈴木利夫、Ｇ組担任山口金三、Ｈ組担任古森貞弘、Ｉ組担任大久保文雄の各先生方、本当に有り難うございました。先生方の大変素晴らしい授業や、日常の何気ないやりとりなどが懐かしい思い出であり、今でも良き手本となっております。

最後になりますが、土浦第一高等学校・附属中学校及び進修同窓会のますますのご発展と会員の皆様のご健勝をとご祈念申し上げます。誠に有り難うございました。

恩師からの便り

青山　和義　先生（高８回）

（昭和36年４月～昭和46年３月
平成６年４月～平成10年３月在職）

母校での思い出

高齢のため、最近人生を振り返ることが多くなりました。特に私にとって感慨深いのは、教員生活の最初と最後を母校で過ごす幸運に恵まれたことです。

昭和36年４月に母校で教員生活をスタートし10年間勤務しました。当時は、土浦市内では、成績優秀な中学卒業生が水戸一高や東京都内の高校へ進学する例が見られました。こうしたことから、土浦一高では、大学進学のための受験指導を徹底して行い、有名大学への合格者を増加させるべきだという考えが強まりました。そのための対策として、具体的には生徒の学力別編成で、合格者発表の翌日に生徒を出校させ学校独自のテストを実施し、その結果で、学年８クラスを最上位１クラスそれに次ぐ１クラス、残りは平均化した６クラスにしていました。そして上位クラスほど授業の進度を速めて教科書を終わらせて、残りの時間で大学入試問題の演習を行っていました。勿論残りのクラスでも学力に応じて進度を速めて同様の対策をとっていました。課外も夏休みなどの長期休暇は当然として、平日でも放課後に計画し、学力向上中心の指導が行われ、そのため部活動が一時低迷し、特に野球部は大きな影響を受けました。学習面では、徐々に効果が現れて進学実績は向上しました。その後入学する生徒の学力が上昇し学力差も少なくなり、やがて全クラス平均化したクラス編成となりました。

学校生活では、若い教員が少なかったため、最初のうちは３つの部の顧問をしていました。軟式野球、ヨット、卓球で主は大学で準硬式野球部に所属していたため軟式野球でした。ヨット部は、海軍兵学校出身の横田先生が技術指導をされていましたので、見守りだけで、卓球部も試合での引率のみでした。そのため土、日曜日もほとんど自宅にいませんでした。長期休業中も合宿などがあり同様でした。ただ若かったので苦になりませんでした。ヨットでの麻生までの遠帆走などは楽しみでした。軟式野球では、大曽根先生が監督をされて昭和46年夏の全国大会で準優勝し、福井国体に顧問として参加し、開会式の入場行進にも参加しました。なつかしい思い出です。試合では１回戦は勝ちましたが、２回戦で敗退しました。

当時１校の在職年数は10年と決められていたため、10年後異動し、その後水海道一高に４年、次からは、新設校の藤代高校に４年、竹園高校に４年半、並木高校に設立準備職員としての半年を含めて７年半勤務しました。その間教頭に昇任しました。その後、茨城県教育庁指導課へ高校係長として転任し、２年間勤めた後、竜ケ崎南高校の校長に昇任し１年後、母校の土浦一高校長に就任しました。４年間勤務し、最後の年の11月１日に創立百周年記念式典が実施されました。その年の３月の卒業生の東大合格者33名、過年度卒10名と合わせて43名は、全国公立高校ではトップになり、花を添えました。

創立百周年に当たっては、記念事業として同窓会館兼アリーナ（小体育館）を建設することになり、進修同窓会が中心になって募金活動を実施することになりました。募金活動を始める時、幡谷祐一会長は、まず火つけ役と話され１千万円を寄附され、もし目標に達しなければ不足分は更に負担すると決意を述べられました。そして意欲的に活動されました。具体的には大阪、仙台の支部会まで遠路出席され、募金への協力を要請しました。また、お仕事のお忙しい中、支部会を優先され、すべての支部会に出席されました。募金状況については、他校で１億円集めるのに苦労した話を聞いていましたので、１年目にあまり集まらない時は心配しましたが、募金活動が２年目なると各支部の活動も活発になり、目標を達成しました。しかも、募金活動期間終了後も募金が寄せられ、最終的には２億５５００万円余になりました。当時の事務長が驚いていました。進修同窓会の底力が示されました。記念式典は、平成９年11月１日に実施され、茨城県副知事、土浦市長、県南地区の県立高校長、土浦市内中学校長の来賓と同窓会、ＰＴＡ関係者が多数出席され、会場の体育館があふれ、小体育館に別会場を設営し映像を見て参加するほどでした。出席された会員からは、後輩が頑張っているのでよい思いをさせてもらっている、との声も聞かれました。

私が土浦一高で教員として学んだことは、生徒の学力をつける方法と生徒の自主性を育てることです。

教員として出発する時、教頭の菅澤先生と教務主任の永山先生に、教員としての心構えをお聞きしたところ、両先生共に身近にいる先生方の動作をよく見て下さいと話されました。模範とすべき先生方が身近に沢山おいでになり多くのことを学ぶことができました。例えば、授業の事前準備として生徒が理解しにくいと思わるところにチェックを入れていました。また１単元終わるごとに小テストを実施し理解度を確認していました。テスト結果の悪いときは、再度教え直していました。

自主性は学校行事の時によく見られ、生徒の主体的行動をできるだけ認め見守りに徹していました。これらのことを学んでいましたので、他校へ異動してもとまどうことはほとんどありませんでした。

現在の私

私は現在、午前中は自宅で家事等で過ごし、午後は碁会所あるいは高校時代の友人と公民館等で囲碁を楽しんでいます。囲碁は一高在職中菅澤先生から「退職後を考えたら囲碁を覚えておいた方がいいよ」と勧められ、先生の指導で覚えました。当時一高では、囲碁が盛んで、２ヶ月に１度程度大会が行われていました。囲碁を覚えて本当によかったと実感しています。囲碁の組織的なことについては、現在、土浦市囲碁愛好家に所属し、退職高校長会囲碁クラブの会長を務めています。どちらも２ヶ月に１回大会があり、楽しみにしています。

卒業生レポート

一回性の哲学

一ノ瀬　正樹（高28回）

一高生だった時間はわずか3年。自分の人生の期間からしたらとても短い。けれども、十代の頃の3年は決定的な影響をのちの人生に与える。私の場合、受験に出やすいから、という不純な動機からだが、一高時代に夏目漱石を片っ端から読み始めたのがまことに重大な始まりとなった。はまってしまったのである。「高等遊民」とか「則天去私」とか、もう明治の知識人の風情の虜となった。私が東京大学を受験しようと決心したのは、なによりも、漱石がいたところだから、というのが主たる理由だったのである。そして、希望が叶い、東京大学に入学した。まずは、駒場キャンパスの図書館。これが非常にお気に入りとなった。静かな雰囲気の中で、書物に浸る。窓外に見える井の頭線の電車。学術の香り満載の書架。これこそ、身を置きたかった環境だ。しかし、自分の憧れは夏目漱石である。その足跡は本郷キャンパスにある。私は、受験生時代からともかく日本史が好きだったので（「カマクラーズ」そして「ムロマチスト」です）、本郷キャンパスの文学部にて史学を本格的に勉強するという選択肢もあったのだが、それを選ぶことはなかった。そもそも「過去がある」という証拠はどこにあるのだろう。「過去」はもはやどこにもないので、本当にあったかどうか、どうやって確かめるのだろう。それに、歴史って、何なのだろう。過去を再現することのはずがない。それは不可能だ。じゃ、何をするのだろう。歴史的事実を客観的に記述するのだろうか。いや、それもそもそもできないのではないか。事実をじかに検証できないだけでなく、「事実を記述する」ということ自体がもとより原理的に困難なのではないか。このことは一般的に当てはまる。「私がいまパソコンのキーボードを叩いて執筆している」。この文は、果たして事実を記述したことになるのか。ならない、と思う。なぜなら、この状況の「事実」というのは、私の周りの環境の動向、私の身体の新陳代謝の状況、PC内部のメカニズムの動き、そうしたものすべてを含んでいるはずだが、先の文は、そうした多くの要素を完全にすっ飛ばしているからだ。私の場合、一高時代からこういう「哲学的」疑問を抱く傾向があったのだが、大学に入り一層そういう傾向に拍車が掛かってきた。だったら素直になろう。こういう私の考え方に直接向きあおう。かくして、私は本郷キャンパスの文学部哲学研究室に進学することになった。

それどころか私は、哲学研究室にて大学院に進み、その後4年間の東洋大学の教員経験を経て、再び恩師に呼び戻されて、母校の東京大学哲学研究室の教員となった。助教授として11年9カ月、教授として11年3カ月、計23年間の教員生活を送ることになったのである。あっという間の23年間だった。不思議なことに、一高時代の3年の方が長いとさえ思えるくらいの、時間感覚である。そしていまは、私学の武蔵野大学にて人間科学部の哲学担当教授として勤めている。

「哲学」というと、「永遠の真理」を追求する、学問の基盤、と捉える人がいる。私の教え子にもそう捉える人たちがいた。しかし、告白するが、私は哲学研究者として長年活動してきて、哲学は永遠の真理を探究する学問である、と思ったことは一度もない。というか「永遠の真理」という概念自体にどうしても胡散臭さを感じてしまう。大学に入って、Jazz に目覚めたことが重大な背景となっている。下北沢のジャズ喫茶「マサコ」。思い出すだけで、当時の、熱くて濃密な響きが、血のたぎるような高揚感が、甦る。いうまでもなく、Jazz の真骨頂は即興演奏である。コード進行やモードに沿って、そしてフォービートに乗って、どれだけリズミカルで、メロディアスで、そしてアバンギャルドなパフォーマンスを紡げるか。お気に入りは、チャーリー・パーカー、ラッキー・トンプソン、ウィントン・ケリー、エリック・ドルフィーだった。とりわけ 'When you hear music, after it's over, it's gone in the air. You can never capture it again' という、名盤 "Last Date" の最後に収められた余りにも有名なドルフィーの肉声は、ほぼ私の座右の銘になってしまった。そうなのである、即興的に奏でられる演奏は、本質的に、そのとき一回ぽっきりであり、再現は原理的にありえないのである。

いや、よく考えてみると、すべての音楽演奏はそうなのではないか。譜面に忠実に、をモットーとする音楽でも、演奏は一回ぽっきりで、同じ演奏はない。テンポや、強弱や、解釈は、そのとき瞬間のものである。いや、聴く側もそうであろう。演奏を聴いて感じる情動、心によぎる心象や感傷、すべてそのときだけのものである。いやいや、こうした一回性は、人間のすべての知的活動にも及ぶのではないか。ある出来事を目撃して何かの情報を得たり、数学の証明を見てなるほどと納得したり。それもすべて、そのとき一回だけ発生している現象である。さきに「事実を記述する」ことへの疑問を述べたが、実は、「事実を記述する」ことも、やはりそのとき一回だけの、世界に対して私たちが言語を使って人為的に介入する営みなのではないか。客観的事実を記述する、と捉えるから不可能のように思えるのであって、もとから「事実記述」というのは、一回だけの、客観的ならぬ主観的な、一つの作品制作のような営為なのだ、と捉え返せば、不思議さは氷解し、固有の意味づけが立ち上がってくる。言い方を換えれば、事実の記述というのは、俳句や和歌といった表現領域と実は連続しているということである。こう考えると、歴史の記述がしばしば変容していくことも、ごく自然に理解される。永遠に持続していく、客観的な真なる「事実」など、もとよりないのである。いや、より正確に言うならば、そうした「永遠の真理」がある、という考え方自体も、そのとき一回的に誰かが提起する、その誰かの「事実記述」という審究での作品的営みなのである。

このような一回性の思想は、実は、今日の言語哲学においても確認できる。現代の言語哲学のなかでも「言語行為論」という考え方は非常に影響力が大きい。それはつまり、言語的発話というのは、単に何かを記述しているのではなく、むしろ何かの行為をしていることなのだ、という視点から言語現象を研究する領域である。「窓が開いている」と述べるのは、単なる事実の記述ではなく、その特定の一回的状況の中で、たとえば暗に「閉めて」という依頼をしていることだ、というように分析するのが言語行為論的な議論になる。私が上に述べた考え方と親和するのは明らかだろう。

このような理解の道筋が、Jazz への傾倒を通じて私の感性にすっと馴染んでいったのは、たぶんに、日本史への関心にも由来していたのだと自己理解している。『平家物語』、西行法師、『方丈記』、これらに通底する「無常」の思想、それが歴史的に日本人の世界観の基盤となっていると思われるが、それはまさしく一回性の思想そのものと言えるからである。『方丈記』の「行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず」こそ、この世界のありようの表現なのではないか。思い返せば、漱石の「則天去私」とは、私にとらわれず、身を天地自然に委ねて生きていくことであり、天地自然が「無常」であるならば、無常のなかにたゆたい、そうした浮動性のなかで安らいでいく思想だと解釈できる。一高時代に受けた漱石からの影響、それはいまも連続して私を導いているのである。

母校だより

令和3年4月 附属中学校開校

教頭　中島健一郎

令和３年４月、土浦一高附属中学校が開校しました。旧制中学時代は男子校だったことから、中学生年代の女子生徒が本校の門をくぐるのは、学校の歴史上初めてなのではないかと思います。義務教育段階での男女共学は、県立学校にとって当然のこととはいえ、歴史的な転換点に立ち会うこととなり、責任の重さに背筋が伸びる思いです。

一期生80名（男女各40名）の出身市町村は14に及びます。この３月まで小学生だった生徒にとって、初めは通学が大変だったようです。しかし、各地域から集う意欲溢れる仲間との学びが何より楽しく、毎日元気に登校できています。附属中の教室は現在高校２年生と同じ階にあり、高校生の優しい気遣いに支えられながらごく自然に生活できています。（中高生の同居という開校前の心配は霧散となりました。）また、何事も自分で考え判断し、行動する高校生の姿に多くの附属中生が刺激を受け、自らの学習や部活動のレベルアップに生かしています。

そんな中、６月には土浦一高最大のイベント「一高祭」に附属中生も参加しました。各グループで附属中学校に相応しい幟（のぼり）旗のデザインを考え制作し、来場者に投票をお願いする形式で「幟旗コンテスト」を実施しました。多くの一高生に自分たちの頑張りを認めてもらい、嬉しそうな笑顔を見せる附属中生が印象的でした。併せて、附属中学校の学校説明会に向けて、動画やポスター、パンフレット作成に取り組みました。附属中生も一高生の多彩なクラス企画を見学したり、ゲートの迫力を感じたりしながら、早くも来年度の企画に向けて意欲を燃やしているようです。附属中生が一高生の姿にロールモデルを見出し、意欲を高める中高一貫教育のよさを感じているところです。

また、学習面では思考力・判断力・表現力を高いレベルで身に付けるこれまでの授業と、クロームブックや電子黒板等のＩＣＴ機器を活用するよさを掛け合わせ、次世代でグローバル・リーダーとして活躍するための資質・能力を育成しています。

さて、今後一期生80名は来年度から下級生を迎え、令和５年度に附属中学校最高学年となります。また、令和６年度には附属中学校から進学する80名と各市町村等の中学校から入学者選抜を経て入学する１６０名を合わせ、１学年２４０名の土浦一高１年生となる予定です。高校入学段階で新たな友人と交流したり切磋琢磨できたりすることも中等教育学校（６年間一貫）とは違った魅力だと思います。

関係各位の多大なるご支援により、附属中学校は順調にスタートを切ることができました。今後も温故知新の精神を忘れず、土浦一高の歴史と伝統を継承しながら学校運営に努めてまいります。

進修同窓会の皆様には、今後ともなお一層のご指導とご協力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

探究学習発表会

３年Ｇ組　渡邊雄樹

１年時の探究学習発表会を通じて、茨城県には溢れんばかりの魅力があることを知りました。それと同時にその無数の魅力を伝えきれていないことを非常に勿体なく感じました。探究学習は２年生でも引き続き出来ることを知り、是非この問題を扱いたいと思いました。

同様のテーマを持つ班員とチームを組み、この問題解決のツールとして私達は「ブラタモリ」というバラエティー番組を活かせないかと考えました。ブラタモリのような国民的番組に注目されれば、人々の茨城県への関心は高まるはずです。しかし、過去２回しか茨城県は取り上げられていません。ならば自分達で、番組でおなじみの地形・開発史的視点により茨城を探究しそのベクトルで発信活動を行えば、埋もれてしまっている茨城の魅力を発することができるのではないかと考えたのです。

私達の研究は実地での調査が不可欠でしたが、年度の頭に緊急事態宣言が発令され、当初の研究内容からは大分縮小する形となりました。長期休業後、地学部に同行してボーリング調査に立ち会い、コア（試料）を得て、茨城県南の地形的特性を探りました。さらに現在に至るまでの開発状況を目で確かめるため、県央から県北各所の都市部を歩いて回りました。こうした体験は皮肉にも移動制限のせいで茨城県内に留まっていたからこそできたことであり、非常事態で神経をとがらせる中、探究学習担当の先生方や各市町村の職員の方達のご協力あってのものだと感謝しています。

探究学習委員を卒業した現在も私の意志は変わりません。今後も茨城の知られざる魅力の発信のため尽力していこうと思います。

一高祭座談会

座談会参加者（各委員長）

運営委員会　岡崎泰希（３Ａ）
第一会場　中里美月（３Ｃ）
第二会場　古川大翔（３Ｈ）
第三会場　坂口叶夢（３Ｄ）
広場委員会　高橋陸翔（３Ｅ）
ゲート委員会　足立航平（３Ｃ）
販売委員会　坪松慶太（３Ｆ）
宣伝広報委員会　菅　清美（３Ｅ）

１　前年度の一高祭が中止になり、先輩達から引き継いだ時の思いについて

岡崎…来年どうなるのかという不安を抱きました。一方で、どんな形であれ74回は開催したいという思は、強くしました。

古川…形や伝統を引き継げるようにしようという思いを強くしました。

高橋…不安だったのは、私達が後輩へしっかりと引き継ぎができるかまた本当に実施ができるのかということでした。

足立…感染の不安に駆られ、どんな感染防止対策をするかが大変でした、先輩たちとの準備が無かったのは悔しかったです。

坂口…73回が中止になり、出演できなかった人達の思いも聞いており、今年度は是非開催したいという思いが強かったです。

中里…先輩の思いを受けて今年度は開催したいという気持ちがありました、一方で後夜祭等人が集まる企画を根本から変えなくてはいけないと思いました。

２　感染対策で苦労したことは

岡崎…国や県の基準に則るのを大原則とし、感染防止にはどうしたらよいか、先生方や各委員会と調整を行いました。

古川…教室の風通しが悪くなるのを防ぐように窓枠よりも高いものは作らないことにしました。

高橋…運営委員会のガイドラインを守り、舞台と客席の距離を離し、出演者や入場者の数も制限し、消毒の徹底をしました。

坪松…食品を販売する時には、シフトに入る人はゴム手袋を絶対につけることを徹底しました。シフトの前後には石けんでの手洗いの徹底もお願いしました。お客さんが店に入る時も消毒をお願いしました。販売する食品は個包装の物にしました。

菅…屋外の休憩所のテーブルの配置や椅子の数等を決めたり、消毒の徹底をしたりしました。また、パンフレットにも他の委員会で求めている消毒等のお願いを掲載しました。

中里…体育館での吹奏楽部・合唱部の公演は完全予約制にしました。一部は電子黒板で映像を流すという形に変更しました。

３　初日・２日目と生徒を分散で登校させるアイデアについて

岡崎…一般公開しないことになり、その中で通常の学校生活よりも感染リスクを下げなくてはいけないと考えました。最終的に、クラスにいる人数をいつもの半分にすることに落ち着きました。クラスに誰がいるのか名簿もつくることになりました。

４　特に力を入れたことや苦労した点や反省等について

古川…５月中旬くらいにはクラス企画とかは大体がきまっていましたが、校内でコロナの感染者が出てしまったために、企画を決め直さなくてはいけなくなったのが一番大変でした。一方で企画の変更をしてもらったクラスからもやはり楽しかったといってもらいました。

高橋…人出が多くないので、ステージの背景を作ったり、運んだりするのが一番大変でした。

足立…活動が制限される中で完成させられないんじゃないかという不安が委員会の中にもありました。反省会の中では、怪我人も感染者も出ずに無事に終えられたのが一番良かったという意見もありました。そうした中でも、文化祭当日に多くの生徒がゲートの前で写真を撮ったり、こんなにすごいゲートを作ったんだと言ってもらえて、やってよかったと思いました。

坪松…販売する物の種類や個数を決めるのが大変でした。特殊な状況だったので、何をどのくらい売るかが難しかったです。結局、思っていたよりも早く売れ切れてしまったので、来年の反省として生かしたいです。

菅…決定事項が突然変わるという側としては、パンフレットを制作する側としては、印刷会社との兼合いもあり、ぎりぎりまで手を加えなくてはいけないという緊迫した状況でした。

坂口…一番大変だったのは、感染対策で、学校側からのように要望と出演者側からの要望との板挟みになったことです。また、騒音対策と感染対策の両立が大変でした。出演者の人からライブをやってくれてありがとうと言われたのは嬉しかったです。

５　これだけ言っておきたいということ、後輩達に伝えておきたいこと

菅…広報委員会は人数が少なくて大変だったのですが、他の委員会の方が臨機応変に手を貸してくれて活動をうまくまわすことができました。こういうところが一高祭の良いところかと思います。

足立…一高祭後の拡大反省会議で先生からも間違えなく今回の一高祭は開催が一番大変だったのではと言っていただきました。そうした中でも、文化祭を通して感染者も出さずに成功裏に終わらせました。この状況は続くかもしれませんが、後輩達もコロナ禍での経験を生かして、困難に直面してもそれを頑張って乗り越えて欲しいと思います。

坂口…他校の実施状況と比べて、これほどの規模で安全に文化祭をやり通せた学校はほとんどありませんでした。一高はすごいんだぞと誇りに思って欲しいです。次の文化祭も楽しみにしています。

岡崎…一高祭をやってみて、こうした状況でここまでやれたのは一高だったから、一高でなければできなかったと思います。各委員長の能力も高かったし、その下で活動してくれた人たちの臨機応変さや機転だったり、一般生徒のモラルの高さが、不安定だった一高祭を最後まで支えてくれました。来年は、今年の反省点や悔しかったことをバネに、よりコロナ禍に適応した一高祭を作り上げて欲しいと思います。

部活動報告

陸上部

3年G組　天田　翔太

高校の陸上競技には、走・跳・投を基本とした20を超える種目があります。個人種目かつ種目によって練習内容が異なる都合上、自ら貪欲に知識を求め、目標に向け自分がすべきことを考え、実行していくことが必要とされます。今年度のチームは各々がこのことを自覚し、実践することが出来ていたと思います。顧問の先生からアドバイスをいただきながら新しい練習を取り入れたりするなど、目標に向けて課題点を改善しようと練習に取り組みました。また、新型コロナウイルスによる、活動時間の短縮などの制約を余儀なくされる中、アップの効率化を図るなどして、練習量を落とさぬよう創意工夫を繰り返しました。このような努力の結果、総体では個々が最大限のパフォーマンスを発揮し、県大会では入賞者５名、うち、優勝者２名という結果を残すことが出来ました。その後に続いた北関東大会では、惜しくもインターハイ出場を逃してしまいましたが、ハイレベルな戦いの中、多くの経験を積むことができました。

先にも述べましたが、陸上競技は個人種目なので、記録を向上させるためには自ら行動することが求められます。ですが、個人種目とはいえど１人で記録を向上させていくのは不可能です。ともにきつい練習をこなす仲間や、事務的なことやタイム測定をしてくれるマネージャー、指導、サポートしてくれる先生などがいて初めて質の高い練習を行ったり、試合で結果を残すことが出来ます。この一高陸上部で素晴らしい仲間や先生たちに恵まれたおかげで、きつい練習も踏ん張り、成長することが出来ました。２年間という短い活動期間であったことが悔やまれます。在校生のみなさんには部活動や委員会で過ごす時間を大切にしてほしいと思います。

最後になりましたが、陸上部の活動にご理解・ご協力くださった先生並びにOB・OGの方々、また、サポートしてくださった、すべての方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

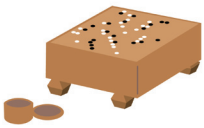
囲碁部

3年H組　森川　遥仁

前年度の囲碁大会はコロナの影響を受け数多くの大会が中止となりましたが、今年の夏はいくつかの大会が開催できたようで、喜ばしく思います。囲碁は相手と１時間以上を共に過ごすのでコロナ禍の現状では不利ですが、全国大会などでは見知った強豪も数多く参加してくださいました。今後の事態が良い方向に向かうことを願っております。

唐突ですが囲碁の魅力とはなんでしょうか。囲碁は日本以外に韓国や中国、台湾などで広く愛されているゲームです。世界の競技人口も0.5億とかなり多めですが、棋風（打ち方）は国によってかなり異なります。最近はAIの台頭によって新手や新たな定石なども生まれてきています。ここにこそ囲碁の魅力があるのではないでしょうか。毎週の部活動で高段者として新入部員と打っていると、自分の視野の狭さに気付かされます。調べたところによると、囲碁の盤面の総数は10の360乗もあるそうです。全宇宙にある原子の数が10の90乗というのですから、これはとてつもなく大きな数です。囲碁はルール上必ずどちらかが必勝になるゲームですが、事実上どこに打つかは「完全に」自由と言えます。そして、これこそが囲碁の魅力であると言えるでしょう。

囲碁は相手がいてこそ成り立つゲームです。どんな名局も、等しく才長けた２人なしでは生まれません。もっと言えば、審判や進行係も重要な存在です。わかやま総文で高校生がこれらの役職を担当しているのをみて、改めてこのようなことを感じました。学校関係者の皆さんの日頃のご理解とご協力にも、感謝申し上げます。今後とも末長くよろしくお願いします。最後に、囲碁部の元部長として、「歩歩是道場」という言葉を送ります。「真剣に学ぶ気持ちがあれば、どこでも道場になる」という意味です。勉強にも言えるかもしれませんね。私はこの言葉を「真剣な気持ちで対局に臨めば必ず得るものがある」と解釈しています。ぜひ一局一局を大事にして囲碁を楽しんでください。



定時制の活動

教頭　奈良　由紀子

令年度は25名の生徒たちが新たに定時制に入学し、全校生徒103名で令和３年度がスタートしました。定時制では昼間にアルバイトをしている生徒が多く、コロナ禍においても仕事と学校生活を両立させながら頑張っています。

６月にはクラスマッチを開催することができ、２年ぶりの楽しい学校行事となりました。９月には校外学習で劇団四季の「アラジン」を鑑賞する予定でしたが、コロナの感染拡大による緊急事態宣言を受け断念致し

クラスマッチの様子

ました。昨年中止となった星光祭（文化祭）は10月末に開催を予定して準備を進めています。昨年に引き続き、コロナ禍で様々な行事が制約を受けていますが、コロナ禍だからこそ得られる貴重な学びの場を大切にして、生徒たちは元気よく学校生活を送っています。学校生活におけるさまざまな活動を通して多くの人と出会い、多様な価値観や考え方に触れながら心身ともに成長し、社会の一員として定時制の学び舎から巣立ってゆく姿を見守りたいと思います。

◆定通体育大会で全国大会出場◆

６月13日に開催された茨城県高等学校定時制通信制体育大会では、バドミントン男子シングルスで１年山崎心輝君が優勝、ダブルスで３年木村晴歩君、２年坂本彪瑠君ペアが優勝、陸上部は１年宮寛泰君が５千ｍと３千ｍ障害で優勝という、素晴らしい結果を残してくれました。卓球部は惜しくも全国大会出場とはなりませんでしたが、手に汗を握る大熱戦をくり広げました。昨年度はコロナ禍で全ての競技種目が中止となった定通大会ですが、今年度は大会関係者の方々のご尽力により開催されました。定時制の生徒にとって部活動ができるのは月水金の週３回です。その限られた時間の中で一所懸命に練習を積み重ね、激戦を制して見事輝かしい栄光を勝ち取りました。

８月にバドミントン部が神奈川県小田原市での全国大会に出場し、男子シングルスの山崎君が３回戦進出、ダブルスは健闘むなしく初戦敗退という結果でしたが、選手にとっては一生の思い出になる体験ができました。陸上部は東京の駒沢オリンピック公園総合運動場で開催される予定でしたが、緊急事態宣言中のため出場辞退という苦渋の決断をしました。来年の全国大会出場に向けて、さらなる飛躍を心から期待しています。

バドミントン全国大会

◆定時制の探究活動◆

水曜日の「総合的な探究の時間」では、１年生から４年生まで全校生徒が６つの講座に分かれて探究活動を行っています。今年度の講座は、①ブッシュクラフトで災害に備える　②世界に通用するグループをプロデュースする　③数独パズルにチャレンジし数字に強くなる　④地元の企業について調べよう　⑤やってみよう！ＳＤＧｓ！　⑥理科の現象をアニメーションや動画で表現してみよう、の６講座です。学年の垣根を越えて縦割りで探究活動に取り組んでいます。

◆定時制文庫◆

昨年度の会報に掲載された定時制文庫の記事をご覧になった鈴木光子さんが、百冊以上の世界文学全集を寄贈してくださいました。櫻井光孝さんが製作してくださった檜の書棚に、約千冊の書籍と並んで収められています。定時制の先輩方から心温まる素敵なエールを受け、生徒たちが読書を通して素晴らしい出会いを体験し、豊かな人生の基盤を育むことを期待します。

定時制文庫に文学全集寄贈

職員室だより

英語科より

英語　浅野　周一

英語科職員室は普通教室棟から特別教室棟へ行く渡り廊下の途中にある。その前を通る者は誰でもその活気に気づくだろう。教員だけで無く、多くの生徒が質問に訪れ、活気で溢れている。一高のシンボルであり、一高を代表するのが英語科職員室と言えよう。

英語科は、真剣に全国ナンバーワンになることを考えている。もちろん、英語運用能力の向上が生徒の将来に役立つと信じているからだ。英語力を高めるためには、普段から英語に接する必要がある。そのためにサイドリーダーは必携である。授業はもちろん、寸暇を惜しんで英語に触れることで英語を活用してコミュニケーションを図れるようになる。そして、その大元にあるのは、生徒の英語学習に対するモチベーションの高さである。やる気がある生徒が一高は多い。それを少しでもサポートすることが英語科に与えられた使命であろう。

資料提供のお願い

旧制中学校・高校の同窓生の皆様が発行された記念誌等（データでも可）を本部にご恵贈下さい。展示・保存・校史編纂の資料として活用させていただきます。

住所変更手続きのお願い

住所や電話番号等を変更された方は、左記のＥメールへ送信下さい。又同窓会会員名簿の不明者欄に掲載されている知人や友人がおりましたら、当人に事務局へ連絡するようお伝い頂きますよう、御協力よろしくお願いいたします。

進修同窓会事務局
Ｅメール shinshu@tsuchiura1-h.ibk.ed.jp
ＦＡＸ　０２９－８２６－３５２１

進路状況報告

東大22名（国公立全国７位）
京大４名
筑波大36名　東北大21名
国公立大医学部医学科11名

進路指導部長　浅野　武雄

「思考力」「判断力」を発揮して解くことが求められる共通テスト初年度でした。問題は難化すると予想されましたが、多くの科目で平均点がアップしました。一方で公民・理科②では科目間の差が大きく得点調整が行われました。また、７科目得点では８割以上の得点者が減少し６割から８割の得点者が増加しました。受験人口減少のため国公立大を目指す受験者数は減少していますが、難関国立大においては共通テストの平均点アップのため積極的な出願がみられ、倍率は前年並みになりました。

私立大においては、志願者が前年比86％とかつて見られないほどの大幅減少でした。受験人口の減少とコロナ禍の影響で出願校数を抑えたと考えられます。また、都市部では入学者数を確保するために合格者数を増やしたことで倍率がダウンする傾向にあります。

学部系統の志願動向は医療・獣医・社会福祉などの資格系学部の人気が復活し、情報などは昨年に引き続き高い人気となっています。外国語・国際系は大幅な志願者減少が見られました。

本校の合格状況については下の表の通りです。難関国立大学の合格者数は、北海道大８名、東北大21名、東大22名、東工大５名、一橋大７名、名大４名、京大４名、阪大９名、九大４名と合計84名です。その他で合格者の多い大学は、茨城大25名、筑波大36名となっています。

次に医学部医学科については、国公立大合格者数が、旭川医科大１名、札幌医科大１名、東北大１名、筑波大２名、香川大１名等の11名。国公立大以外では、防衛医科大１名を含む14名の合格でした。

現役進学率は66．３％となり、本校において３年連続の高いものでした。この内、新卒生の国公立大合格者数は１５８名でした。

本校の生徒が受験する大学は、筑波大・東京大・京都大・東北大・東工大・一橋大で全受験者数の約半分を占めています。いわゆる難関国立大といわれる大学が多く、目標を高く設定し、最後まで諦めない姿勢が窺えます。附属中学が併設され、学級数減となる状況を踏まえますと、今後一層の学習指導・進学指導の充実を図っていかなければならないと考えています。

令和３年度入試合格状況

国公立大学

大　学	合格者	新卒
旭川医科	1	1
北海道	8	4
東北	21	15
山形	1	1
茨城	25	17
筑波	36	31
埼玉	6	5
千葉	10	8
お茶の水女子	6	5
電気通信	1	1
東京	22	17
東京外国語	1	1
東京学芸	2	1
東京工業	5	3
東京農工	5	3
一橋	7	5
横浜国立	5	3
金沢	2	1
山梨	2	
信州	3	2
浜松医科	1	1
名古屋	4	4
京都	4	3
大阪	9	6
神戸	3	1
香川	1	1
九州	4	2
札幌医科	1	1
福島県立医科	1	1
茨城県立医療	2	2
高崎経済	4	2
東京都立	4	2
都留文科	2	2
その他	11	6
国公立合計	220	158

私立大学

大　学	合格者	新卒
青山学院	14	9
学習院	13	8
慶應義塾	33	18
駒澤	16	12
芝浦工業	34	15
順天堂	7	6
上智	17	13
成蹊	8	1
専修	7	5
中央	38	17
津田塾	8	5
東海	13	4
東京女子	7	5
東京電気	12	6
東京農業	16	8
東京理科	106	56
東邦	7	3
東洋	9	5
日本	22	13
日本女子	16	9
明治	52	31
明治学院	7	3
法政	29	15
立教	37	27
早稲田	56	36
同志社	5	1
立命館	15	5
その他	143	98
私立大学合計	747	434

大学校

大　学	合格者	新卒
防衛医科	2	1
気象	1	1
国立看護	1	1
防衛	1	1
大学校計	5	4

医学部医学科

大　学	合格者	新卒
旭川医科	1	1
札幌医科	1	1
東北	1	
福島県立医科	1	1
筑波	2	2
山梨	2	
浜松医科	1	1
島根	1	
香川	1	1
東北医科薬科	1	
国際医療福祉	3	1
北里	1	
順天堂	1	
帝京	1	1
東京医科	3	
東京慈恵会医科	1	
東海	1	
日本医科	1	
防衛医科	1	1
医学科計	25	10

田んぼアート「夢をもつ」

令和２年度　進修同窓会決算書

収入総額　12,362,443 円
支出総額　9,625,000 円
差引残額　2,737,443 円 (次年度へ繰越)

【収入】　単位：円

	項目	予算額	決算額	比較増減(△)	備考
1	繰越金	2,892,424	2,892,424	0	前年度繰越金
2	終身会費	60,000	60,000	0	2 名
3	年会費	7,000,000	7,755,000	755,000	2,362 名
4	入会金	1,750,000	1,655,000	△ 95,000	新会員　計 331 名× 5,000 円
5	繰入金	0	0	0	
6	寄付金	0	0	0	
7	雑収入	576	19	△ 557	預金利息
	合計	11,703,000	12,362,443	659,443	
	ご寄付者名				

【支出】

	項目	予算額	決算額	残額（△）	備考
1	総会補助	400,000	317,204	82,796	総会資料，会場設営等
2	会報発行費	3,400,000	3,087,316	312,684	会報印刷，発送
3	通信費	400,000	31,500	368,500	切手，はがき
4	卒業記念品費	250,000	220,446	29,554	卒業証書ホルダー
5	卒業周年記念品費	500,000	500,000	0	卒業周年記念品積立
6	会議費	400,000	69,584	330,416	役員会，評議員会経費
7	支部連絡費	400,000	0	400,000	
8	生徒奨励費	1,200,000	1,100,000	100,000	生徒会補助
9	生徒活動補助費	800,000	734,459	65,541	各部活動用品
10	別途積立金	1,000,000	2,700,000	△ 1,700,000	別途積立金会計へ
11	慶弔費	100,000	0	100,000	
12	事務局費	1,000,000	864,491	135,509	担当者手当，郵便振替手数料等
13	旧本館活用事業費	920,000	0	920,000	
14	海外研修旅費	600,000	0	600,000	
15	予備費	333,000	0	333,000	
	合計	11,703,000	9,625,000	2,078,000	

上記のとおり決算しました。

令和２年３月９日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長　大野　金一

監査の結果上記のとおり相違ないことを認めます。

令和３年３月９日

監事　高山　了　㊞
監事　助川博夫　㊞
監事　杉山　博　㊞

令和３年度　進修同窓会予算書

収入総額　11,548,000 円
支出総額　11,548,000 円
差引残額　0 円

【収入】　単位：円

	項目	予算額	前年度予算額	比較残額(△)	備考
1	繰越金	2,737,443	2,892,424	△ 154,981	前年度繰越金
2	終身会費	60,000	60,000	0	
3	年会費	7,000,000	7,000,000	0	
4	入会金	1,750,000	1,750,000	0	350 名 (全 320・定 30) × 5,000 円
5	繰入金	0	0	0	
6	雑収入	557	576	△ 19	預金利息
	合計	11,548,000	11,703,000	△ 155,000	

【支出】

	項目	予算額	前年度予算額	比較残額(△)	備考
1	総会補助	200,000	400,000	△ 200,000	中止による連絡費等
2	会報発行費	3,400,000	3,400,000	0	会報印刷，送料
3	通信費	400,000	400,000	0	切手，はがき等
4	卒業記念品費	250,000	250,000	0	卒業証書用ホルダー
5	卒業周年記念品費	500,000	500,000	0	卒業周年記念品
6	会議費	400,000	400,000	0	役員会，評議員会等経費
7	支部連絡費	400,000	400,000	0	支部会補助
8	生徒奨励費	1,200,000	1,200,000	0	生徒会補助，生徒会活動功労賞
9	生徒活動補助費	800,000	800,000	0	部活動補助
10	別途積立金	1,000,000	1,000,000	0	別途積立会計へ
11	慶弔費	100,000	100,000	0	香料，弔電
12	事務局費	1,000,000	1,000,000	0	担当者手当，郵便振替手数料等
13	旧本館活用事業費	920,000	920,000	0	事務用品・旧本館公開経費
14	海外研修旅費	600,000	600,000	0	生徒海外研修引率旅費
15	予備費	378,000	333,000	45,000	
	合計	11,548,000	11,703,000	△ 155,000	

※項目間の流用を認める。

上記のとおり提案いたします。

令和３年３月２７日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長 大野　金一

寄附金がありました（令和３年７月21日）
（令和２年１１月１日～令和３年１０月３１日まで）
高校７回卒業生一同　　４８，３６８円

会費納入のご協力とお願い

令和2年度会費納入状況は、2，364名の皆様方から7，815，000円を納入していただきました。会費は、各事業項目に充てられますので、ご協力よろしくお願いします。

進修同窓会規則(抜粋)

第12条　本会の経費は第10条の入会金、年会費、終身会費及び篤志寄付金を以て充てる。

一、年会費は、6年目以降は、3千円以上とする。

二、終身会費は、3万円以上とする。

編集後記

令和3年は昨年度に引き続き総会の開催中止を余儀なくされました。延期された東京オリンピック・パラリンピックも開催され、本校旧本館玄関前が聖火のスタート地点となりました。周年行事もコロナ禍により振り回される変則的な事態となってしまいました。周年行事に参加するのを旧交を温める好機とする周年該当者の皆さんにとっては、同窓会の周年行事は貴重な交流の機会だけに残念の一言ではかたづけられないことと思います。▼恩師からの便りを寄せていただいた青山和義元校長は、本校卒業生（高8回）であると同時に土浦市立土浦第四中学校の第1回卒業生でもあります。当時は、湖畔にほど近い市内大岩田から毎日徒歩で、中学校まで通学されたそうです。また今回卒業生レポートを書かれた一ノ瀬正樹東大名誉教授（高28回）は、御実家は土浦市内でも歴史ある文房具店で、ご厄介になった皆さんも大勢おられると思います。著名な英米哲学研究者であるだけでなく、2015年3月東京大学農学部構内に新たに建造された「ハチ公と上野英三郎博士の銅像」の製作のリーダーシップをとられたことが特筆されます。秋田犬ハチ公と飼い主上野博士との心温まる絆は本校卒業生一ノ瀬正樹東大名誉教授の活動が大きな力となったということです。（詳細は「東大ハチ公物語」一ノ瀬正樹・正木春彦編（東大出版会）参照）▼なお、今年6月から8月にかけて毎日新聞に―「ぐるっと東日本」母校をたずねる―で柳生博さんを皮切りに、9名の卒業生に取材した記事が掲載されました。登場した9名は①柳生博（俳優・日本野鳥の会名誉会長・高7回）②守安功（ディー・エヌ・エー取締役・高44回）③安藤統夫（元阪神タイガース監督・高10回）④新川帆立（小説家・高61回）⑤能町みね子（文筆家・高49回）⑥長有紀枝（立教大教授・難民を助ける会会長・高34回）⑦椎名麻紗枝（弁護士・高12回）⑧香取秀俊（東大教授・高35回）⑨千葉とも子（作家・高49回））。中でも香取秀俊東大教授は、光格子時計の発明でノーベル物理学賞受賞の有力候補者として注目されています。▼本校附属中学校も新規開校し、校内に80名の若い熱気が共鳴しています。（黒）

□　□　□　□　□
進修同窓会会報第78号
令和3年12月1日
会報編集委員会
委員長　武井　秀一（高23）
委員　飯村　弘（高5）
櫻井　忠男（定53）
高山　了（高18）
竹井茂雄（高19）
鈴木　義人（高21）
鴻巣　茂（高21）
黒岩　英行（高23）
江田　麻裕子（高34）
大久保　博（高37）
校内　片岡　達郎（副校長・高33）
須藤　一道（全日教頭）
奈良　由紀子（定時教頭）
中島　健一郎（中等教頭）
大森　伸一（事務室長）
宮代　篤（高36）